

---

# 辺境の街じゃない所にて？

ヤマネ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

辺境の街じゃない所にて？

### 【Nコード】

N8929W

### 【作者名】

ヤマネ

### 【あらすじ】

旧題、「ざ・らいとすたっふ」

拙作「辺境の街にて」と同じキャラクターを使った突発ネタ小話的なものの集まりになる予定です。

もちろん橙乃ままれ様作「ログ・ホライズン」の二次創作になります。

原作その他のキャラクターの改変というか大規模破壊を行ってしま

っている危険があります。  
ご注意ください。

## 01 (前書き)

東の討伐軍 から1ヶ月。再び不穏な動きを見せ始めるゴブリンの軍団。

それに挑むのは極秘裏に集められた D・D・D の精鋭メンバー達だった。

津軽 あまに様作「D・D・D日誌」の三次創作的な小話になります。

「D・D・D日誌」をご覧の後に読み頂かないと意味不明だと思います。

とっても面白いので是非にこそ読んで下さい。むしろ嫁ちがった読め。

色々な使用許可を快諾して下さいましたあまに様に感謝。

「右手前方、1km程先に見えるあの篝火の中心、目標の<sup>ゴブリン</sup>緑子鬼<sup>ジェネラル</sup>の将軍が居る部隊で間違い無いでゴザルな」

偵察から戻った D・D・D のメンバー、通称ゴザルが報告する。

口調と性格こそアレだが、彼は私が D・D・D に所属していた頃からのギルドの中心人物の一人で、装備も腕も経験も一流のトップクラスの冒険者だ。まあ、口調と性格はアレなのだが。

私達は現在、ザントリーフの山間深く、300匹ほどのゴブリンの軍団が駐屯する谷間を眼下に見下ろす山の中腹にて、作戦前のブリーフィング中だ。

事の始まりはクラスティ君から私に届いた出勤要請。

ザントリーフ半島掃討戦から1ヶ月ほど過ぎた現在、イースタルのゴブリン退治は中級レベルの冒険者に対して円卓会議が討伐クエストを発行するという形で、「完全に殲滅はしていないが、この前のような大規模な進軍は抑える」という状態に落ち着いていた。

しかし1週間ほど前にこのザントリーフ山間にて、ゴブリン将軍の姿と中規模の軍団が再び目撃されたことで少々事態が変わる。

ゴブリン将軍はモンスターとしてのレベルはさほど高くはないものの、曲がりなりにもレイドラंक。一介の冒険者パーティーにとっては少々やっかいだ。また、自由都市同盟イースタルとの条約調印を間近に控えるこの時期に、ゴブリン達に大規模な戦闘行動

を起こされるのも上手くない。

そこで 円卓会議 では、これ以上軍団が大きくなる前に頭を潰して脅威を減らそうという意見でまとまったと聞いている。

その結果が何故かこの私を含む D・D・D の精鋭メンバーによる、いわゆる将軍暗殺計画というわけだ。

「名高い 突貫黒巫女 にこんなつまらない仕事をお願いするのも心苦しいのですが。ええ、別に私がアキバの面倒なあれこれ押し付けられているのに、クシさんだけ郊外でのんびり過ごしているのが恨めしいからとかそういう理由は全然ありませんので、ご心配なく」

とかいつも通りの澄ました口調でさらっと言いやがって。

ちくしょう、陰険サド眼鏡め。私だってあれはあれで結構面倒なことが多いのだ。特にヤエが色々やらかすし。

「ったく、1パーティーでアレ落としてこいとか、クラスティ君も中々に人使いが荒いよねえ、っていうか何で私が駆りだされなくちゃいけないんだか」

「D・D・D のメンバー多しといえども隠密行動が可能で近接戦闘もこなし、かつ大局をみつつ作戦行動が取れる回復職というのは貴重です。むしろ先輩以上の適任者はいません！ 今回のメンバー選出の際に私から隊長ミロードに要請を出していただけよう、おどしもとお願いさせていただきました！」

「・・・山ちゃんエ・・・」

こいつが元凶だったか。

なんなのだろうか、この山ちゃん。

普段は冷静な真面目っ子なのだが、時折こういった変なスイッチが入って奇行に走る。

「皆もさあ、こんな無茶な作戦はボイコットしようよ。別にギルマスや山ちゃんだからって無条件に言うこと聞くことないんだしさ。いつから D・D・D はブラック企業の仲間入りをしたのさ？」

「いえ！ 三佐<sup>さん</sup>さんと 黒姫 と作戦行動とか全俺会議にて賛成多数、むしろ満場一致ですから！」

「我らギルド内の参加希望者多数の屍を踏み超えて此処に立っている精鋭でゴザルよ！ 実際クシ殿に逝けといわれれば拙者、一人でもあの陣中に特攻する所存！」

「特攻 MAJIDE!？」

「むしろこの逆境！ リアルオレを残して先に行け！ とかが期待されるこの逆境！ まさに逆境こそ好機！」

「・・・山ちゃん、こいつら大災害後も相変わらずこんななの？」

「ええ、概ねいつも通りです・・・」

今日も D・D・D は平常運転だった。

## 01 (後書き)

やっちまった感が。

4巻のモンスターファイルのデータを受けて、ゴブリン達の数を上方修正。

## 02 (前書き)

大規模オンラインRPG エルダー・テイル 日本サーバー最大の戦闘系ギルド、D・D・D といえばもはや知らぬものは居ないであろう。

円卓会議 の代表を輩出し、かの 東の討伐軍 の中心を担ったアキバ最強の戦闘系ギルド。

しかし、主に大規模コンテンツにおける戦果とギルドマスターである 狂戦士 クラスティの名声が強調されがちな D・D・D の活躍の影で、知る人ぞ知る精鋭部隊が暗躍している事を知るものは少ない。

「ザ・ライトスタッフ」

この物語は、そんな彼らの波乱万丈に満ちた栄光の軌跡である。

少々話は脱線したものの、私達は現在、ザントリーフ半島の溪谷内に駐屯する ゴブリン・ジェネラル 緑子鬼の将軍の率いる中規模軍隊を眼下に望む山の中腹にて、作戦前のブリーフィングを継続中だ。

ゴブリンの軍団300匹に対して挑むのは D・D・D の精鋭とはいえずか1パーティー。

戦力差は歴然なのだが、そのメンバーの表情は一様に暗さを感じさせない。

「んでは山ちゃん参謀、作戦案の提示をよろしく」

この状況に色々なメンツに文句を言いたい気分ではあるのだが、ここまで来てしまったからには仕方がない。

私は冷静な真面目っ子かつ、フィールドモニター D・D・D の戦域哨戒班の統括を一手に担う優秀な後輩に作戦の説明を促す。

「基本方針としては、このまま陽が落ちるのを待ち、闇夜に紛れての奇襲となります」

「半数が武器攻撃職っていうこの編成は、進軍スピードと突破力重視ってわけでゴザルね」

「ご明察です。敵の布陣が一番薄い溪谷北西の切り立った尾根を降下、最短距離を進軍し、将軍の首を取ります。これが一番成功率が高いかと愚行いたします」

「なるほど。重装備が居ないこのメンバーなら、あの崖でも移動可

能。で雑魚は無視して一点火力集中で短期決戦ってわけですね！  
さすがは三佐さん！」

ふむ、何となく上手くいきそうな雰囲気ではある。  
でも一つ、気になる点があるんだが。

「で、その後の退路は？」

「ノープランです。幸い特攻とかオレを残してとか言ってる人達が  
居るので、盾にすれば半数は逃げ延びられるかと」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………MAJIDE?」

「まじです」

サラリと何ともえげつないことを答える山ちゃん。

「実際特攻命令来ちゃったでゴザル！」

「玉碎MAJIDE!？」

「ああ逆らえない！ そんな冷徹な三佐さんの命令に、全俺会議は異議を唱えられない！」

「ゴザル！ 任せた！ お前達のは！ 忘れない!!」

「いや実際！ オレを残して先に行け！ って言っていたのはお主でゴザルから！」

ちよつとまてい。

山ちゃんのおでこに「ずびし！」とチョップ一閃。

「あいたっ」

「相変わらずの表情でその発言とか、ツッコミ待ちにしても判りにくすぎるから！」

「ごめんなさい」

(ツッコミ待ちMAJIDE!?)

(冗談？ 実際今の冗談言ってる目でござったか!?)

(そんな事より全俺メモリーは、今の三佐さんの「あいたっ」を記憶することで精一杯ですから!)

ノータイムで素直にあやまる山ちゃん。ちくしょう、ちよつと可愛じゃないか。

全くそつという態度だから周りから怖がられるんだとか小一時間説

教してやりたい所ではあるが、愛想のよい山ちゃんというのも想像するとなんだか怖いので思い直す。

他のメンバーは端に集まって何だかボソボソと話しているが、十中八九碌でも無い内容なので聞くだけ損だろう。

「で？ 改めて山ちゃん参謀、今度こそ実現可能な作戦案の提示をよろしく」

「ええと、奇襲というのは同様なのですが、軍団の進軍開始を待ち、この先南東5km、溪谷の幅が極端に狭くなるポイント通過のタイミングを狙います。ここであればターゲットへの距離も最短。脱出経路も確保可能です。ただし・・・」

「何か問題があるんですか？」

「その奇襲ポイントと現在ゴブリン達が駐屯しているこの溪谷との間に 大地人 の小さな集落が一つあります。今からでは避難勧告および誘導を行う時間的猶予がありません」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・MAJIDE?」

「まじです」

「……………」

「これは実際特攻も有りかもしれないでゴザルね……」

「だな。將軍落とせば他は逃げていく可能性だって小さくはないしな！」

「まさに逆境！ これこそ俺の望む逆境！ いいだろう運命！ この試練乗った！」

「いやいやいや、まてまてまて。」

「なんでそうやって直ぐ熱血しちゃうかねこいつらは。」

「ちょいまちみんな。ゴザル、敵の総数は300で間違いはない？」

「だいたい280、実際多くても320にはまず届かないでゴザルな」

「將軍と取り巻いてる親衛隊とか手強そうなのはどんな感じ？」

「將軍がレイドランクでレベル62。取り巻きの鉄躯緑鬼ホブゴブリンがレベル60弱でゴザル。今回ヒルジャイアント丘巨人は出てきてござらんから、その他で手強いとなると調教師テイマーが操る魔獣どもがパーティークシャーマンで50前後。あとは前回は姿を見せていなかった祈禱師の部隊が場合によっては厄介でゴザルね。レベルとしては高くて40つてところでゴザルが」

うん、ぜんぜんオツケイ。勝算ありじゃないかい？

「山ちゃん。今回のコレ、ジェネラル 将軍 落とせっていうミッションで、一点突破に拘ってるみたいだけどさ」

「こっち方向で、こんな楽しそうなことは久々だ。思わず顔がにやけてしまう。」

「別に、アレを全滅させてしまっても構わないんだろう？」

「っ！……はい。問題ありません！」

「何……だと……？」

「久々の 突貫 でゴザル！ 討ち入りでゴザルよ！」

「キタコレ！ リアル弓兵キター！」

「姐さん！ それ死亡フラベぶらっ！？」

元 D・D・D の 突貫黒巫女 こと櫛八玉くしやたま。  
突貫の二つ名を作った伝説の数々は伊達ではない。

そんな彼女のコレも、また平常運転だった。

## 02 (後書き)

駄目だ。本家に比べて何かが足りない。  
何よりも！会話のキレが足りない！！

4巻の情報を加味して、ゴブリん編成あたりを修正。

### 03 (前書き)

大規模オンラインRPG エルダー・テイル 日本サーバー最大の戦闘系ギルド、D・D・D。

大災害直後の混乱時に多くの中小ギルドを吸収し、現在ではその構成人数は1500名を超える、アキバの街でも随一の戦闘系ギルド。

現在ではギルドマスターのクラスティが 円卓会議 の議長を務めていることもあり、アキバの街の住人達にとっても身近な存在となりつつある。

だがゲーム時代、大規模コンテンツを半独占に近い状況でクリアしていたその戦闘能力と組織力、それを支えるきわめて高い情報管理能力は健在であり、昔から エルダー・テイル をプレイしているプレイヤー達にとっては依然、畏怖の対象であることに変わりはない。

そんな、ゲーム時代に D・D・D を畏怖の象徴とたらしめたギルドの中核メンバー達は、この大災害後の セルデシア の大地に於いても人知れず暗躍していた。

「ザ・ライトスタッフ」

これは、外部に漏れることの非常に少ない、そんな彼らの貴重な資料映像である。

大分話は最初と変わってきたものの、私達は現在夕暮れが差し迫るザントリーフ半島の山間部にて、眼下の溪谷に展開するゴブリン緑子鬼ジェネラルの將軍の率いる中規模軍隊に対する殲滅作戦のブリーフィングを継続中だ。

「近くに 大地人の集落があるっていうんだったら、どっちにしても頭だけ落として、ゴブリン達がばらけちゃったんじゃないかあ危険なのは変わらないじゃん？ まあ、將軍が レイド ランク、側近が パーティー ランクだとしても、所詮はレベル60前後な訳だし、半数以上は40以下の一般モンスター。一人50匹倒せば良いんだから、完全に囲まれちゃったりしなければイケルと思うんだよね。山ちゃん参謀、そこんどこどう？」

「うふふふ、たのしい。何せ久々ですからね、先輩と一緒にパーティーで行動なんて。無茶な行動は相変わらずですけど、やっぱりこれがないと面白くないですね。やはりここは上手く話をまとめてもう一度うちに復帰してもらう算段を進めなくちゃいけませんね。ふふふ」

山ちゃん、おまえもか。

おでこに「ずびし！」とチョップ一閃。

「あいたっ」

「で、山ちゃん参謀、そこんどこどう？」

私は冷静（な筈）な真面目っ子（だった筈）かつ、D・D・D  
フィールドモニターの戦域哨戒班の統括を一手に担う（多分）優秀な後輩に戦力の詳細な分析を促す。

「はっ！ すみません！ ゴブリンの軍団の数は300匹強。レベル構成から考えると、適性70レベル弱のフルレイド中規模戦闘 規模と予想されます。比べて私達は1パーティーのみとはいえ全員が90レベル以上で、ギルド内でも戦闘能力的には高位のメンバーです。性格的にはアレですが。勝算は十分あるかと思えます」

「フルレイド 中規模戦闘 に1パーティーで 突貫 とか実際萌えるもとい燃えるでゴザルな！」

「逝けます！ 全俺会議も肯定多数、むしろ満場一致で大勝利ですから！ むしろピンチ発生の吊り橋効果でムフフとか嬉しい議題の提示すら！」

「歡喜に震えるのは解るが今はまだ大人しくしている、俺の右腕！ あと少しだ。少し待てば嫌ってほど開放してやるぜ・・・」

「厨二妄想MAJIDE!?!」

さすがD・D・Dの古参メンバー、怖じけるどころかノリノリのやる気まんまんである。

性格がアレで、言っていることが一部イマイチ意味不明ではあるが。

「問題点は2つ、一つは長時間の戦闘後に最後に控えるのがレイドレベルの将軍とその取り巻きであるという事。どれだけ消耗していない状態でそこまで辿りつけるかどうかが鍵になると愚考します」

確かに。通常 レイド ランクのモンスターといえば、同レベルの 冒険者 フルレイド 24人規模で挑む相手。今回の場合、將軍のレベルは62と私達とのレベル差が30近くあることと、メンバーが 秘伝 持っててあたりまえ、装備にしても（幻想級）がちらほらなんていう廃集團なので、十分すぎるほど勝機はあるとは思っただが、それもコンディション次第だ。

將軍にたどり着くまでにボロボロの状態になってしまっていては、勝てるものも勝てなくなってしまう。

「もう一つは戦域哨戒が出来ないという事。戦闘の経過によってはターゲットであるゴブリン將軍が、仲間を見捨てて逃亡する可能性がありますが、戦闘行動を行なっている最中では、それを補足するのが困難です。高レベルではなくて構わないのですが、せめてもう1パーティー同行していれば戦場の監視ができるのですが、その人手が・・・」

そう言いながら、山ちゃんは狙撃用の妖精軟膏フェアリーバームを使用した後、周囲の山に視線を泳がす。

「居そうな気がしますね・・・」

「うん、こっちにも心当たりがある気がする・・・」

私と山ちゃんはフレンド・リストから、それぞれその「心当たりがある人物」を選択し、念話機能を立ち上げる。

「ユズコ！ 山の中腹に貴方の姿を確認しました。速やかにこちらに合流してください」

「ダル太！どうせ野次馬で来てるでしょ、シゴトあるからこっち来

い  
『

『げ、見つかった。ユズコさんがそうやってゴソゴソ動くから、見つかったんよ！ だから大人しくって言ったじゃないッスか！』

『うぐ、しまった。でもさ、ダル太郎だってちゃんと隠れられてるとは思えないんだけど、それ。頭に枝つけてとか、コントじゃないんだし』

『『いいから、さつさと駆け足！』』

『『あ、アイ・ママ！！』』

D・D・Dの戦域哨戒班。  
フィールドモニター

班長を務める三佐さんささんと高山三佐ミサは、その淡々とした口調と「怖い人オーラ」で、場合によってはギルドマスターのクラスティよりも恐れられている存在である。

優秀な情報分析能力を持つメンバーを多く配下に従えるその戦域哨戒班は、D・D・Dの頭脳と比喻されることもあり、一種独特の地位を獲得している。

ユズコと呼ばれる彼女もまた、戦域哨戒班の一員だ。

そんな彼女たちのコレも、またある意味、平常運転だった。

### 03 (後書き)

前書きに一番時間がかかったというなんとという本末転倒。

そろそろキビシイ。

そして我ながらヒドイ。

ゴブリン編成変更による修正と、ほんのちょっとだけ加筆。

## 04 (前書き)

エルダー・テイル で鳴らしたオレ達突貫部隊は、濡れ衣を着せられ 円卓会議 に逮捕されたが、收容所を脱走しアキバの裏街に潜った。

しかし、裏街でくすぶってるようなオレ達じゃあない。筋さえ通りゃカネ次第で何でもやってのける命知らず。

不可能を可能にし、巨大な悪を粉碎する、オレ達 突貫野郎Dチーム！

「私はリーダー、高山三佐<sup>みさ</sup>。通称三佐<sup>さんさ</sup>さん。

戦域哨戒と保育の名人。

私のような天才戦略家でなくては、百戦錬磨の強者<sup>へんたい</sup>どものリーダーはつとまりません」

「おまちどう！ 俺様こそ俺会議、通称『クレイジーセルフカウンシル<sup>シル</sup>』！

<sup>モンク</sup>武闘家 としての腕は天下一品！ 奇人？ 変人？ だからナニ？！」

「私は<sup>サモナー</sup>召喚術師 のユズコ。通称『ルーキー』です！。

センパイの相手は自慢のエアノーリッドでお手のものです！」

「厨二だ。右手に漆黒なる炎の魔神を封印した俺を加えて、チームもぐつと盛り上がったね」

「そして拙者はゴザル。通称も『ゴザル』。腕っぷしは見ての通り

でゴザルよ。

でも、実際切腹だけはカンベンでゴザル」

「切腹MAJIDE!？」

「そして影の指導者、謎の人物、それが私、クラスティです」

「オレ達は、道理の通らぬ世の中にあえて挑戦する、頼りになる神出鬼没の！」

「「突貫野郎Dチーム!」」

「助けを借りたい時は、いつでも言ってくれ!」

「山ちゃん、私、帰っていいかな・・・」

太陽が西の山々の影に沈み最後の輝きを空に映すザントリーフ半島の山間部。

新たに2名のメンバーを加え、私達のゴブリン殲滅大作戦のブリーフィングも最終確認の段階。

眼下の渓谷の間に蠢くゴブリンの軍隊も篝火揺らし、今にも進軍を始める様子を見せている。そろそろタイムリミットだろう。

「では先ほど言ったとおり、ユズコは山間部からの戦域哨戒。ゴブリン達の陣形を逐次私に報告するようお願いします。優先するのは<sup>ジェネラル</sup>將軍の位置。特に作戦後半、逃亡の可能性があるので見失わないよう注意して下さい」

「ダル太はユズコちゃんの護衛だからね。男の子なんだからちゃんと守ること」

「ハイ！ 了解です、センパイ！」

「アイ・マム!!!」

ルーキー2人は何故か直立敬礼で山ちゃんに答える。

「なんだかゲームだった頃よりも軍曹キャラが濃くなってるとはじゃないだろうか。」

「私達は南東方面、進軍開始の隊列の乱れに乗じて敵集団の先鋒部隊を横撃。後、そのまま最後尾のゴブリン將軍まで全ての敵を殲滅します」

「300匹の軍団に1パーティーで正面から突貫とは実際正気の沙汰とは思えないでゴザルな！」

「正面MAJIDE!？」

「だが、それがいい！」

「俺会議は最初から満場一致で三佐さんに全権移譲ですから！ 地獄の果てまで一緒に一緒に頂きますから！」

他のメンバーは、変わらずノリノリのやる気まんまんである。

相変わらず性格がアレで、言っていることが一部イマイチ意味不明ではあるのだが。

「先輩とは 大災害 後の連携は初となりますので、最初数度の接触は私が指揮を取らせて頂きます。が、各メンバーの特性を把握頂いた後に指揮権を移譲いたしますので、その後の陣頭指揮はお願いいたします」

「えー、山ちゃんがずっと指揮とればいいじゃん」

「ダメです。サボらせません。パーティー単位の管制に関しては先輩の方が能力が上です。それに私にはユズコからの哨戒情報の伝達を行う必要がありますので。無茶な作戦を言い出した責任はちゃんと取って下さい」

「まあ、今回力任せの突貫でゴザルからして。実際クシ殿が適任でいいじゃない」

「リアル 突貫 MAJIDE!？」

「俺のこの右腕の漆黑なる炎の魔神も、お前に従うことに異論はないようだ……」

「なんとたって 黒姫 の指揮ですからな。帰ったらギルメンに羨まがしられる懸念すら！ どう考えたって満場一致ですから！」

「……あのさ山ちゃん、私って D・D・D でいったいどういう風な認識されてるんだろう？」

「聞きたいですか？」

「……いい、やめとく……」

うう、しゃあないか。んではちょっとばかり地獄の一丁目、覗きに行くのでしょうか。

「正面12時方向20mに小集団1。その後方時差30秒で同集団1。先行部隊は近接戦闘で、後続を範囲魔法で仕留めます」

山ちゃんが淡々とメンバーに指示を出す。

私達は現在、<sup>ゴブリン</sup>緑子鬼 の先鋒部隊を目の前にした茂みに隠れ、息を潜めている。

ゴブリンの軍隊はその知能の低さからか、進軍とは言っても厳密な隊列を組んでの行動などというものは取れず、5〜10匹程度の

ある意味 冒険者 のパーティーのような集団ごとに、バラバラと同じような方向に移動するという形態を取ることがほとんどだ。

今回の進軍に関してもそれは変わらないようで、先頭で2部隊が突出した状態で居ることを哨戒班タル本達から得た情報から確認した私達は、この茂みにて先制攻撃を仕掛けるタイミングを計っている状態だ。

「それじゃ会議の時間もこれにて終了、これからは現場のオシゴトって訳ですね」

口元に不敵な笑みを浮かべ、ネクタイの首元を締め直すのは何故か英国調の三つ揃えのスーツのようなクロースマーを身にまとった『俺会議』。

身長も高く顔の彫りも深いシブいオジサマ的風貌もあってそのスーツ姿が妙に似合っているのだが、装備に関しては基本ファンタジーな見た目のプレイヤーが多い エルダー・テイル の世界では、あまりにも異質すぎてシユールだ。

「でゴザルな。実際、三佐さんさんと 黒姫 の顔に泥を塗るわけにはいかないでゴザルからして、いっちょ気合を入れて行くでゴザルかね」

それに答えるのは、巴の紋章が彫られた額当てを巻き、脇差を構える『ゴザル』。

その姿はまるで某週刊少年漫画に出てきそうなエセ忍者スタイルなのだが、まだ少年と呼べそうなその雰囲気には似合っていると言えなくもない。

「待ちわびたぜ。俺の右腕もそろそろ我慢の限界だ。早く暴れさせると疼きやがる・・・」

などと、相変わらず意味不明の言葉をぶつぶつと発しながら邪悪に笑い、右腕をしきりに擦るのは『厨二』。

金色の刺繍で縁取りした暗色のローブ姿と頬に刺青の入ったその顔はさながら魔王の横に控える悪の魔法使いというような風貌。

正直近づきたくない雰囲気である。

「……………」

そして小柄な身長の上はあろうかという大ぶりのグルカナイフを両手に持ち、無口に佇むのが『MAJIDE』。

見た目は南アジアまたはインドあたりの民族衣装を彷彿とさせる革鎧を身に纏う小柄な美少女なのだが、非常に残念なことにその人は男性。いわゆるネカマさんである。

普段MAJIDE！？が絡む以外の言葉を発することがほとんど無いのと、その発言も別に女性を演じようというものでもないのでもあ慣れてしまえば特に気になるわけではないのだけれど。慣れてしまった自分に若干の危機感を覚えないでもないのだけれど。

ちなみにこのキャラクターとプレイヤーの性別や体格差の不一致というのは、この世界においてそれなりの問題となっていたりする。ボイス・チャットが導入され、一般化していたエルダー・ティルではキャラクターの性別に異なる性別を選ぶプレイヤーというのは少数派ではあったものの皆無というわけではなく、それを是正するための外観再決定ポジションはマイナーなイベントで配布されたのみの非常にレアなアイテムだ。

うわさで聞くところによると、“妖精薬師”ロデリックを中心としたロデリック商会がその開発を試みているようなのだが、今のところ成功したという情報は聞こえてきてはいない。

ちなみにRADIOマーケットではキャラクターの外観に合わせるボイスチェンジャーを開発したとか何とかなんて話があった

りして、何とも本末転倒。アキバの街は相変わらずの caos である。

「それじゃ、先制は俺が務めさせてもらいます。ゴザル、MAJIDE、追従よろ！」

そう言つと散歩にでも出かけるかのように無造作に、スーツ姿の『俺会議』がゴブリンの先鋒部隊の前に飛び出す。

さほど素早く見えるわけでもない動作なのだが、するつと先頭の鉄軀緑鬼ホブゴブリンの前に立つと、流れるような動作でその頭に対してハイキックを一閃。

あまりにも自然な動作で近付かれたからなのか、反応の遅れたホブゴブリン達に対して、その動きを止めることなく続けて蹴りを放つ。

「今回のメンバーは基本的に全員 大災害 前とプレイスタイルを変えていませんので、改めて先輩に説明する必要は無いかもしれませんが……」

仲間達の戦闘から視線を外すことなく、山ちゃんが私に対して、D・D・D メンバーの特性を淡々と説明する。

「『俺会議』は能力的には攻撃特化の 武闘家モンク です。本人も空手の有段者とのことで、それを生かした攻撃の多彩さが彼の売りですね。しかし全くもって場違いな見た目のあのクロースマーは無駄に北欧サーバーまで足を運んで仕立てた上位（制作級）装備で、何故か高い防御力を誇り、総合的には 守護戦士ガーディアン 並の前衛性能を發揮します。性格はアレですが」

その『俺会議』の影に隠れるように接敵した小さな影が、不意に敵集団の中央に踊り出す。

その小さな体を補うためか、『MAJIDE』は巨大なグルカナ

イフを持つ両腕を一杯に広げると、まるで独楽にでもなったかのよう  
うに回転し、周りの ホブゴブリン 達にその刃を叩きこんでいく。

「『MAJIDE』は二刀流グルカナ이프の スワッシュバックラー 盗剣士 です。彼の  
売りは高いレベルでバランスの取れた装備とスキルになります。特  
化した部分が無い分、多様な状況に対応できる非常に能力の高いプ  
レイヤーですね。もちろん 盗剣士 ですので今回のような対多数  
戦闘では主力として期待できます。普段MAJIDE!?が絡む以  
外の言葉を発することがほとんど無くて、未だに何を考えているの  
かよく分からないのがアレですが」

そんな2人の不意打ちに碌な反撃もできず混乱していた ホブゴ  
ブリン 達から少し離れた位置に居た数匹のゴブリン シャーマン 祈祷師 達  
が、ようやく我に返ったのか、あわてて呪文を唱えようと杖を構え  
る。

だが、シャーマン達はその呪文を完成させるよりも早く、いつの  
間にかにその背後に回っていた『ゴザル』が シャーマン 達の首  
筋にその手に持つ苦無をずぶりとねじ込む。

「『ゴザル』は先輩もよくご存知だとは思いますが、 D・D・D  
の中核スタッフも務める、若手の中では特に成長著しい アサシ 暗殺者  
です。敵の背後に回るその動作や、的確に急所を突くその攻撃力  
など非常に優秀なプレイヤーであるのですが、あの語尾とよく解ら  
ない方向に向いてしまっている忍者への拘りが何ともアレなのが残  
念でなりません」

などと言って山ちゃんがため息をついている間に敵の先行部隊は  
全滅。

だが、既にこちらに気づいているらしい ホブゴブリン の後続  
部隊が禍々しい雄叫びを上げながらこちらに突撃してくるのが見え

る。

「先行部隊殲滅完了でゴザル！ 後続の接敵まで想定カウント5！  
いけるでゴザルか？」

シャーマン に止めをさした『ゴザル』が私の後ろで控えていた『厨二』に対して確認の言葉を投げる。

「誰に物を言っている。あ、当たり前のことをきくな。が、がはっ  
！」

『厨二』は何ともいっつもどおりの不適な口調でそれに答えるが、その態度とは裏腹、いつの間にかにの顔色は真っ青で口元からは血まで垂らしている。

しかしその本人は、その口元の血を拭うこともなく呪文の詠唱を始める。

「冥府の底より湧き上がる憎悪の炎よ、我が仮初の身体に纏わり付くこの痛みを介してその醜き姿を晒すがいい！ くらえ、デモンズ・ペイン ー！！」

呪文の詠唱完了と共に、直前まで迫った敵後続部隊の中央に赤黒い炎の柱が発生する。

その柱は見る間に敵部隊のゴブリン達を全て飲み込み、一瞬にしてその姿を炭化させる。

『厨二』は数ある エルダー・テイル の攻撃魔法の中でも、特殊な条件下においてではありませんが、最大のダメージを叩き出すデモンズ・ペイン を得意とする ソーサラー 妖術師 です。死に関して記憶の欠落が発生することが判明している現在でも ペイン系 の魔法

をメインとして最大ダメージに拘るあたり大概にアレですが、ゲームであった頃から長年培われたその技量と、その攻撃力は十分に優秀と言えます」

ペイン系 というのは 妖術師 の攻撃魔法の中でも特殊な性質を持つ一連の魔法の事を指す言葉だ。

この系統の魔法は通常の状態で使用した場合には、同レベル、同コストの他の攻撃魔法の半分程度の威力しか持たない。

しかし、自身が受けたダメージ量に比例して威力が上がり、自分のHPが50%を切ったあたりで他の魔法の威力を追い越し、10%まで行くと1発で他の魔法の2倍弱のダメージを弾き出すほどの威力となる。

エルダー・テイル がゲームだった時代には、自ら毒薬などを服用して極限までHPを削り、当たれば1発で敵を倒し、ミスをおかせば即死亡などというスリリングな戦闘を楽しむ 妖術師 というのは多くはないものさほど珍しい存在というわけではなかったのだが、死という現象にアイテムや経験値以外のリスクが存在する現在でもこのスタイルを貫いている 冒険者 というのは下手をすると彼以外居ないのではないだろうか？

しかし最初に集まった時から判っていたこととは言え、性格的にも能力的にも何ともアクの強いメンバーが揃ったものである。

確かに優秀であることは間違いないのだけれど。

「ていうかさ、コレ私居なくてもどうにかなっちゃうんじゃない？ 実際今私何にもしてないんだし。やっぱ指揮は山ちゃんにしない？」

「駄目です。却下です！ 今回はこの2戦でインターバルが取れま

したが、これ以降下手をすると最期まで連戦の可能性もあります。  
大規模戦闘<sup>レイド</sup>に匹敵するような長時間の戦闘が予想されるこの状  
況、先輩のD・D・Dのメンバーの中でも屈指の<sup>リーダー</sup>指揮官と  
しての経験と能力は必須です!!」

うう、なんだか山ちゃんの目がギラギラしてて怖い。  
変なスイッチが入っちゃったモードな気がする。

「はい、了解しました。僭越ながら次から指揮を取らせて頂きます  
です……」

ああ。私、コレ終わったら、この前やっと出来た鯉節で和食教え  
るって屋敷のユウリちゃんと約束したんだ……

## 04 (後書き)

あれ、短くて楽とかの筈だったのになんだろうこれ？

あと、次回、最終回！予定！

## 05 (前書き)

それは、平凡なプレイヤーだったはずの私、櫛八玉に訪れた小さな事件。

信じたのは勇気の心。手にしたのは カンナギ 神祇官 の力。

すれ違ったままぶつかり合った思いは、光の中に消えてしまっ  
て。手探りで進んで行く道が、本当に正しいのかどうか、迷う時  
もきつとあるけど。  
立ち止まらずに駆け抜けた足跡は、きつと自分のこれからにつな  
がって行くはずだから。

神祇官 少女リリカルくしやたま、始まります。

「先輩、タイトルが違うばかりか、語呂が悪すぎます。  
あと少女は無理です。年齢詐称甚だしいです」

「『俺会議』、前衛私とスイッチ！ ケモノどもは私が止めるから『ゴザル』は テイマー 調教師 達を落として！ 『厨二』は10時方向のアレに最大火力で！」

先輩は指示を出すと同時に、今まで戦列を支えていた『俺会議』と入れ替わりパーティーの先頭に立ち、高速詠唱にて次々と 霊縛りの符を放ち ゴ布林テイマー の操る獣魔達の行動を止めていく。

その先輩の動きを切欠にして、他のメンバーも行動を起こす。

『MAJIDE』は相変わらずの無表情のまま、動きを止めた状態で密集した ヒボクリフ 翼鷲馬 や、 ダイアウルフ 魔狂狼 に対して両手に持つ湾曲した巨大なナイフの連撃を叩き込み、『ゴザル』はその獣魔達の背後に隠れる ゴ布林テイマー 達に忍び寄り止めをさしていく。

口から血を流し続ける顔色の悪い『厨二』は凄惨な笑みを浮かべながら、得意の デモンズ・ペイン で左前方から迫る後続の ゴ布林 達を一瞬で焼き尽くす。

先輩に変わって後方に下がった『俺会議』にその『厨二』のガードを一時任せ、私自身も後方から襲いかかってきた ゴ布林 数匹に対して、愛用のデスサイズ、カラミティ・ハーツ を振るう。

D・D・D のメンバー達も久々の先輩をリーダーとしての戦闘ではあるが、相変わらずその指揮は的確。既に敵軍団の半数以上を殲滅し、そろそろ パーティー ランクのモンスターもまばらに現れ始めているが、私達に大きな消耗はない。

本人に自覚はさっぱりないが、エルダー・テイル 内において

クシ先輩は結構な有名プレイヤーだ。

神祇官 が装備できる鎧の中ではほぼ最高の防御力を誇る（幻想級）アイテム 源氏の鎧 を身に纏い、装備したものを職にかかわらず 武士 と同等の白兵武器を使用可能としてしまうという反則的な特殊能力を持つ、こちらも（幻想級）の 源氏の箆手 を持ち、その能力をもって アメノマ 製の大太刀を大規模戦闘の最前線で振るう、D・D・Dの三羽鳥 の一人。

そんな様から付いた二つ名が、

突貫黒巫女 、 レイドランクの黒姫 、 黒剣もドン引き 。

しかしそんな猪突猛進なイメージを持たれそうな二つ名から裏腹、クシ先輩の真価は 神祇官 としての日本サーバー内でも1、2を争う程の経験と技能の高さにある。

カンナギ 神祇官 は3つある回復系職業の中でも特に熟練を要する職業とみなされており、その理由はその固有回復スタイルである ダメージ遮断 の特殊さにある。

この ダメージ遮断 というのは厳密には回復魔法ではなく、魔法をかけた相手に対して一定量までのダメージを無効化する障壁、いわゆるバリアのようなものを創り出すという能力だ。

そのため 神祇官 には「ダメージを受けたから回復をする」というような後手の対応ではなく、「ダメージを受けそうな対象に対してあらかじめ障壁を貼る」といった戦況の先読み能力が必要になる。

長年の経験からか、自身が持つ適性からなのか、先輩はこの「戦況を先読みする」という能力が異常に高い。

その先読み能力は適切なタイミングで味方に対して ダメージ遮断 魔法を行使するというだけには留まらず、強力な攻撃スキルや魔法を行使しようとするモンスターに対する 行動阻害 魔法の使

用タイミング、しいては今回のような複数集団と対峙した際の部隊運用にまで及ぶ。

その能力に加えて、その容姿と面倒見がよくてさばさばとした性格からかギルド内外でも先輩の人気は非常に高く、大災害以前、D・D・Dにて頻繁に行われていた大規模戦闘でも、先陣を切るパーティーや小隊の「リーダー部隊長」としてまず候補に上がるのは先輩の名前というのが恒例となっていた。

そんな先輩が大災害直前の引退騒動を経て、現在辺境の街に本拠を置く小ギルドのギルドマスターなどという閑職でのうのうとしているなどというのは、D・D・Dにとって、しいてはアキバの街にとって損失であると言わざるを得ない。

ギルド復帰の打診は有耶無耶のままに流されてしまったが、それであればこちらも有耶無耶のうちに作戦に巻き込んでしまい、実質D・D・Dの要員であるというような状況を作ってしまうばいなのだ。

今回のこの作戦に関しても、元々は24人規模フルレイドの人員を派遣して対処することが検討されていたところを、先輩を引っ張り出す理由付けのために最小編成とし、隊長ミロードに要請を出していただけよう、おどsもといお願いさせていただいたのだ。

実際これはD・D・Dだけでなく、アキバの街の安定の為に必要なことなのである。

決して、ヤエ先輩やダルタスだけ先輩と一緒に楽しそうに羨ましいとか、なんだか最近特にギルド内で怖がられているようで寂しいとかそういう個人的な理由からではないのである。

うふふふ。逃しはしませんよ、先輩。

「山ちゃん、敵布陣報告！」

すこし考え事をしている隙に周囲の敵集団はあらかた処理されてしまったようで、先輩から哨戒情報を促す言葉が私に飛ぶ。

「はい！ 2時方向、狼込みの敵集団2がカウント20の距離。 1時接敵中の敵後方、時差なしでノーマル1です」

「おーけー。んじゃ、左回りこんで接敵数減らすよ。私が先頭、『俺会議』は後方支えて。『厨二』、ヒールするから安定するまでHPを30%まで戻して」

「アイ・ママー!!」

「えっとき、それやめようよ、山ちゃんじゃないんだしさ・・・」

む、私だったら良いと言ったのでしょうか。納得行きません。

うふふふ。次はどんな作戦に巻き込むか早速考えておかなくては いけませんね。

「いや、山ちゃんも妙に不機嫌な顔したり、なんか悪い感じにやけたりするのやめようよ、怖いから」

「最終目標、ゴザル緑子鬼の將軍、11時方向奥に目視確認でゴザル

」

「うっしや。でも焦りは禁物だからね。逆時計回りに外側から削るよー」

「アイ・ママー!!」



## 05 (後書き)

おわらんかった。

というか、これ短くても良いんだってのを思い出しました。

というわけで、次回こそ、最終回！こんどはホント！

## 06 (前書き)

大規模オンラインRPG エルダー・テイル 日本サーバー最大の戦闘系ギルド、D・D・D。

構成員の平均レベルでは 黒剣騎士団 に劣り、結束力では 西風の旅団 には及ばないなどと言われるものの、その数と綿密な組織化において右に立つギルドはなく、東日本最強のギルドという肩書きに異を唱える者は居ないだろう。

ギルドマスターの 狂戦士 クラスティはアキバの街の自治組織 円卓会議 の代表も務め、実質アキバの顔と言っても過言ではない。

そんな華麗な顔を持つ D・D・D の中において、決して表に顔を出すことなく、ギルドを、ひいてはアキバの街の平穩を守るために暗躍する精鋭達がいた。

「ザ・ライトスタッフ」

これはそんな漢達「いんせき」の汗と涙と友情の物語である。

「すみません！ 敵最終目標ロスト！ 現観測地を放棄、再補足を試みます！」

ユズコさんが念話にて女史に報告を入れる。

山の中腹で戦域哨戒を行っていたオレ達の眼下には、既にその8割程が既に倒された ゴブリン・ジヘネラル 緑子鬼の将軍 の率いる中規模軍隊の成れの果てが広がっている。

上から観戦していたボス達の戦闘は圧巻という他ない。

その圧倒的な攻撃力と緩急を付けた進軍で次々と敵を分断し、上から見ていてもここしかないという場所に布陣しての各個撃破。1時間ちよつとの戦闘であつという間に現在のこの戦況だ。

唯一の誤算が自らが乗る巨大武装車を捨ててまでの将軍の逃亡の速さ。

あまりに一方向的な戦況に油断していたオレ達のミスだ。

「はい！ それは細心の注意を払って。定時連絡は3分毎で続きます！」

幸いなことに再補足の為の索敵行動の許可は女史から出たらしい。オレは今まで見ていたこの眼下の溪谷を表す簡易地図をしまい、剣と盾を構え直す。

「ううー。なんだか労いと心配だけされてしまいました。怒られた方がまだ気分が楽ですよー」

「やっちゃまったのはしょうがないツスよ。大体の方向は予測付きま

すからどうにか挽回しないと！」

「ですねー。では私の召喚した アルセイイス 森精霊 を先行させるので、ダルト太郎は後方警戒をお願いするですよ」

「了解ッス。じゃ、急ぎましょう！ あいつ逃げ足早そうっすから、上手く前に回らないと！」

オレ達はゴブリン将軍が消えた溪谷の北西方面を目指し森の中を走る。

普通であれば木々が生い茂り走って動くなど不可能な山中なのだが、ユズコさんが召喚した 森精霊 の特殊能力なのか、その精霊の通った後ろには獣道程度の広さではあるが木々のトンネルのような道が出来るため、それなりに素早い移動が可能だ。これなら追いつくことも可能かもしれない。

5分ほど走っただろうか、不意に生い茂っていた木々が消え、目の前にちよつとした広場のように開けた溪谷の景色が広がる。

想定していたゴブリン将軍の逃走経路に先回れるであろう観測予定地だ。

「観測地Bに到着です！ はい！ 周囲の警戒、見渡せる場所の確保に移行しま・・・ええっ?!」

早速報告の念話を入れていたユズコさんの言葉が止まる。

同時にユズコさんから少し離れた位置、溪谷の広場と森の境にその体を漂わせていた 森精霊 が、森の中から振り下ろされた無骨な ポール・アックス の一撃によって儚く消滅する。

その森の中から、 ゴブリン 緑子鬼 としては一際大きな体に禍々しい骸

骨などを装飾にあしらった鎧を纏った姿がのそりと現れる。

しまった、予想よりも早い。

ユブリン・ジエネラル  
緑子鬼の將軍だ。

オレは咄嗟にユズコさんと敵の間に立ちふさがる位置に滑り込み、こちらに將軍の敵愾心ヘイトを向けるために、アンカー・ファンゲのスキルを放つ。

「ユズコさん、逃げて！ 南東方向からボス達も向かってるはずですからそっちに！ あまり時間は稼げないツスから急いで！」

こいつのレベルは62、数字的には現在のオレのレベルより低いのだが、何せ相手は レイド ランク。防御に専念したとても大して持つとは思えない。とはいえユズコさん一人が逃げる時間くらいは稼いでやる。

「で、でも、ダル太郎……」

「オレも後から追いつくツスから早く、急いで！」

「うう、わかった！ 絶対センパイ達連れてくるから！！」

躊躇していたユズコさんが走りだす。

正直オレまで逃げ切れるとは思えないが、ここで2人とも倒される訳にはいかないし、少しでも時間を稼げばボス達が間に合う確率が高くなる。

全く損な役回りだが、駆け出しとはいえオレは 冒険者 で 守護騎士ディアンだ。仲間を、ましてや女性を置いて逃げるなんてわけにはいかない。

巨体から振り下ろされた ポール・アックス の一撃が、構えた

盾に叩きつけられる。

さすがは レイド ランク。直撃した訳ではないのにこれだけでHPが1割も持って行かれる。

オレの貧弱な攻撃なんてこいつ相手では意味をなさないだろう。反撃は完全に捨てて後方へ、後方へと体を下げつつ、あるかどうか分らない逃走のタイミングを探る。

しかし襲いかかる ポール・アックス の連撃は止まらず、オレのHPはじりじりと削られていく。

「ちくしょう！ 少しでも長く足掻いてやる！ これで打ち止めだぜ、 キャツスル・オブ・ストーン ！！」

残りHPが1割を切った所でオレは虎の子のスキルを発動する。

キャツスル・オブ・ストーン は 守護騎士 のもつ緊急時に使用する最終手段的なスキルだ。

10秒間だけではあるが、あらゆる敵の攻撃から受けるダメージを無効にすることが出来る。

しかしその再使用規制時間リキャスト・タイムは10分と長く、1度の戦闘で実質1回しか使用できない最終手段だ。

オレの残りHPはほぼゼロ。この10秒が実質オレに残された最後の時間というわけだ。

しかし最後まで足掻くと決めたからには、この10秒も無駄にするつもりはない。

ダメージが発生することがなく、防御をする必要がないこの時間を使って、オレはありったけの特殊攻撃スキルを放つ。

「ひとつくらい効きやがれ、 シールド・スマッシュ ！ ウ  
エポンブレイク ！！ アーマーブレイク ！！」

レイド ランクのモンスターというのは、ほぼ例外なく相手の

能力を低下させたり、相手の行動を阻害するような特殊攻撃に対する抵抗値が高く設定されており、オレの攻撃が効果を表す確率は極めて低い。

実際、効果を発揮したのは相手の防御力を低下させる アーマーブレイク のみ。欲を言えば相手を数秒相手の動きを止めてくれる シールド・スマッシュ あたりが決まってくれば次の手も打てたのだが、もはやこれで手詰まりだ。

キャッスル・オブ・ストーン の効果が切れるまであと1秒。大理石のような光沢を帯びていたオレの身体が次第に光を失い元の色へと戻っていく。

「んだよ、畜生。ここまでかよ・・・」

せめて最後まで目だけは瞑るまいと、目を血走らせ ポール・アックス を振りかぶる ゴブリン将軍 を睨み返す。

その瞬間、オレの身体を纏っていた魔力は消失する。無骨な錆びた斧刃を先端に持つ ポール・アックス がオレめがけて振り下ろされる。

もはやあの攻撃を防ぐ手立てはオレには無い。

「ガキイイーン!!!」

しかしオレの耳に聞こえてきたのは、鋭い金属音。オレの命を絶とうと、目の前まで迫っていた斧刃は、半透明な五

芒星の光に跳ね返される。

「ふー間一髪。まったく無茶しおってからに。でもカツコ良かったぞ、男の子!」

慌てて振り返ると、そこには左の肩にその身長程もありそうな大太刀を担ぎ、前に突き出した右手の呪符で印を結ぶボスの姿。

「ですが、中々に見所のあるルーキーです。全俺会議的にも今回のMVP最有力候補という下馬評ですよ」

その言葉に前方に視線を戻すと、いつの間にかオレの目の前には長身のスーツを着込んだ後ろ姿。

不意に現れたスーツ姿に、ゴブリン将軍は奇声を上げて再びその武器を振り上げる。

しかしその武器が振り下ろされるまでのその瞬間、小さな影が懐に飛び込み、その両手、両足にグルカナイフの連撃を叩き込む。

その攻撃の効果か、将軍は武器を振り上げたその身体を硬直させてもはや動くことができない。

「MVP、MAJIDE!？」

既にゴブリン将軍には興味がないかのように、その手足を硬直させる付帯効果付きの剣戟を放った本人は、オレの方を振り返って何故かびっくり顔だ。

「でゴザルな。そのレベルでレイドランクに防御力低下を決めてお膳立てとは、だいぶポイントが高そうぞゴザルし」

続けて、ゴブリン将軍の後方に広がる森の暗闇の中から、無数の苦無が襲いかかり、その巨体に突き刺さる。

「全く最後に手柄を横からかつ攫われるとはな。オレも焼きが回ったもんだぜ！」

苦無に続いて、頭上から、ゴブリン将軍を襲うのは、不揃いに尖った氷の塊の嵐。

その攻撃魔法を放った本人は、ボスの後ろから、まるで悪役のような黒いローブ姿で歩み寄る。

「全くあんなタイミングで逃げ出すとは予想外でした。手こずらせてくれたものです。しかしこれで終了ですね」

その言葉と共に身動きが取れずもがく、ゴブリン将軍の首に、まるで死神の持つそのような巨大な鎌の刃がかけられ、数瞬の後に振り降ろされる。

それが300匹ほどのゴブリンの軍団を率いて進軍した、ゴブリン緑子鬼ジェネラルの将軍の最後だった。

「うわーん！ 本当にまにあってよかったですよー！！！」

「うわ、ユズコさん！ まった、ちょいまったー！！！」

さっきまで切羽詰まった泣き顔だったユズコが、今度は満面の笑

みでダル太に走り寄り、そのままの勢いで抱きつく。まあ、まさにリアル「オレを残して先に行け！」なんてされちゃったわけだから、もう気分はヒロイン。吊り橋効果でちょっとドキドキしちゃったりなんなりと色々あってもしょうがないだろう。

まあこんなシチュエーションに耐性などあるはずも無かるうダル太は目を白黒させながら慌てている。

「なんとというリア充っぽいシチュエーション。妬ましいでゴザル。妬ましいでゴザルよ拙者！」

「全俺会議も満場一致で吊るし上げで可決ですから！」

「公開処刑MAJIDE!？」

「くっ！ まさかリアルオレを残して先に行け！ がこんなところで！ 俺以外で！」

例の他のメンバー達は、端でうずくまりながら、何やらドロドロとしたオーラを発しながらブツブツとつぶやいているが、十中八九碌でも無い妬みなので聞くだけ損だろう。

まあ、そんなこんなで色々と面倒ではあったけど、今回の騒動もこれにて一件落着。さっさと愛しの我が屋敷に帰って、お風呂にでも浸かって一息いれたいところである。

「あ先輩！、お風呂なら私も一緒にさせてもらいたいですー！、センプイも一緒にお邪魔しにいきましょうよー」

「お風呂MAJIDE!？」

「いや、あなたは女の子モドキだから、一緒はダメだから」

「.....」

「いや、そんな上目目線で訴えかけてもダメ！」

「はい、という経過で多少の予定変更は有りましたが滞り無く作戦は完了です。はい。了解しました」

山ちゃんも多分クラスティ君への報告が終わったのだろう、こっちに帰ってくる。

しかしなんだろう、嫌な予感がする。

「討伐は完了しましたので、私達はこのままマイハマの キャッスルシンデレラ 灰姫城に直行、警備の任に当たります。報酬の受け渡しもそちらで行いますので、先輩も同行願います」

「えーヤダ。絶対碌でも無いことが付いてくるし。私は帰る！」

「駄目です、却下です。事後処理を放棄して先輩だけ大きなお風呂に入って足を伸ばして、もふもふなベットに転がり込むなんて許せません！」

「いやーだー！　こら山ちゃん！　首根っこ掴んで引っ張るな！　ダル太も助ける！　私はかーえーるーんーだー！　屋敷でお風呂が！　あと鰹節が！！」

「ええと、ボスと女史っていつもこんななんツスカ？」

「ええ、概ねいつも通りなのですよ・・・」

今日も D・D・D は平常運転だった。

## 06 (後書き)

とりあえず、これにておわり!!

今後、改稿のマークが付いても誤字修正とかだけだと思います。

と、とりあえず勢いで書いてみたこの話ですが、当人では正直どこが良くてどこが悪いのか既に分からなくなったりします。

どこが面白かったとか、どこがつまらんとか、どこが分かりにくいとか、キャラ壊してるんじゃないかねえよとか、描写薄いんだよボケとか、1文1文長いんだよゴラとかご感想頂けると幸いです。

## 前編（前書き）

大災害より数年前のお話です。

前編だけだと章タイトル詐欺っぽいですが、このあとは D・D・  
D がらみが減ってザック様登場なのでごめんなさい。

## 前編

「シンジユク駅ビル廃墟にて、単体レイドランクモンスター、レツサーベヒモスの出現確認！討伐宣言はまだありませんけど、どうしますか？」

ギルドチャットに狩りを行っていたであろうギルドメンバーからの報告というかメッセージが流れる。

ギルドチャットというのは、所属しているギルド、私で言うならD・D・Dのメンバーのみが参照することのできる伝言板のよ  
うな機能だ。

現在のエルダー・テイルでプレイヤー同士の会話といえば電話のように音声でやりとりをするボイスチャットが一般的ではあるのだけれど、多くのプレイヤーで共有したい情報などの伝達などではやっぱり文字情報が有利。特に私達D・D・Dのようにオンライン状態のメンバーが常時100人以上もいるようなギルドで全てのメッセージを音声でなんてことは聖徳太子様でも不可能だろう。なのでD・D・Dではギルド内で共有したい情報の伝達や、中核メンバへの報告など、ギルドチャットの使用頻度は結構高いのだ。

とはいえ、その大半は、「NPCのレヴィネラ様に踏まれたい！」とか「あんな悪女ねえよ、ティアリス様一択だろ。妹キャラ的に考えて！」とか「まあ2人とも俺の横で寝てるんだけどなっ」とか「妄想乙」とか「死ぬ！」とか、ろくなものじゃなかったりする  
んだけれど。

「最近単体レイドしてねえし、やりてえな！」

「前のポップの時も シルバーソード に持ってかれたし、ここは実行の方向で！」

「今、 ベヒモスの牙 値段上がってるんで、実入りもいいですよ」

ギルドチャットに次々とメッセージが書きこまれていく。

単体レイドランクモンスターというのは、決められたフィールドにランダム周期で出現する単体もしくは数匹の共をつれて出現するレイドランクモンスター。大規模戦闘 クエストのように事前に色々な手続きをこなしたりすることなしに、その場に行けば挑むことの出来る、いわゆる 大規模戦闘 の簡易版みたいなものである。簡易版というだけあって倒したことで得られる報酬もレイドクエストよりは劣るのだけれど、それでも貴重な制作素材や運が良ければ結構貴重な（秘宝級）の装備を得ることができる。人数さえ集めれば結構簡単に挑める事もあって、単体レイドというのは エルダー・テイル でも結構人気のあるコンテンツの一つとなっているのだ。

「ギルマス・・・はインしてないですか。ではインしてるスタッフの中で一番上って誰です？」

「ユタ殿ではござらんか？」

「いや俺じゃねえだろ。三佐さんか姉御じゃね？」

「クシ先輩ですね。主に実年齢的に考えて」

こういう事の最終決定は基本的にギルドマスターの役目なのだけ

れど、現在クラスティ君はゲームにログインしていない。

D・D・D ではこういう場合、中心スタッフの誰かがその代理をして行動することが多いのだけれど、今回なんだか私にお鉢が回ってきちゃいそうなるよろしくない雰囲気だ。あと山ちゃん、人を年寄りみたいに言うな。

「よし決まりだな。突貫の姉御、指示ヨロシク」

うわ、決定か。ちくしょうユタめ。あとで泣かす。

「うう、しゃあないか。んじゃユタ、共通掲示板にレイド討伐宣言、あとギルド外からアタッカー中心の2パーティー募集かけて。レベル下限は80にしとこか。30分後現地集合ってことで」

「了解、文面はいつも通りでいいよな」

「うん、よろしく。突貫 とか何とか変なことは書かないでね」

「ちつ、つまんねえな。黒巫女主宰、単体レイド大突貫祭り！とかした方が盛り上がりとおもっぜ」

「却下。ダメ、絶対」

ユタめ調子にのりおってからに。あとで絶対泣かす。

単体レイドモンスターというのは、種類ごとに出現場所はある程度の範囲で決まっているのだけれど、出現頻度には今のところ法則性が見いだせていない。討伐後1日経たず再出現することもあれば、数ヶ月出現しないこともあったりする。

結果、ヤマトサーバーの場合では、単体レイドの討伐権利はゲー

ムをプレイしている全てのプレイヤーが見ることの出来る共通掲示板に討伐すると一番最初に宣言したものが得るといいう早い物順な暗黙のルールが適用されている。

ちなみに今ユタにお願いしたのは、この単体レイドは D・D・D が討伐するよつてことと、その際にギルド外から2パーティー分の討伐メンバーを募集するから希望者は名乗りでてねということである。

外部から討伐メンバーを募集するのは、ぶつちやけ世間体のためだったりする。

私達 D・D・D は多分ヤマトサーバーでも一番 大規模戦闘の攻略実績の多い戦闘系ギルドで、一部のプレイヤーからは 大規模戦闘 や、それによつて得られるレアアイテムを独占してるなんていう批判をされることも多くなつてきている。

こつちからしたら独占なんて気持ちは全然ないし、あれはあれで準備やら何やら大変なんだと色々言いたいところではあるのだけれど、まあ無用な争いも起こしたくないということと、 D・D・D で単体レイド討伐を行う場合、ギルド外から半数弱のメンバーを募集するというのが恒例になっているのだ。

「メインタンクは・・・ ヤエいたよね、『ヤーヴェ』になつて出る？」

「おーけー。今狩り中だけどギルメンだけ編成だから、すぐ戻つて代われるよ〜」

レイドモンスターとの戦闘を成功させる要因の半分以上は、装備も経験も優秀なタンクを担当するプレイヤーの確保にかかっていると云つてしまつても過言じゃないと思う。

タンクには敵の全ての攻撃を受けきる防御力、敵愾心ヘイトを自分一人に向けるため、タウンディングのスキルを常時かけ続けることができるだけのMP管理能力、加えてどうしても防御力が高い防具、高いタウンディングスキルの階級が必要になってしまう。

タンクを担当するプレイヤーが死亡してしまったり、MPが枯渇して敵の敵愾心ヘイト管理ができなくなってしまう後は阿鼻叫喚、防御力の低い他のプレイヤー達が次々となぎ倒されて全滅なんてことになってしまう。

その点ヤエというか、ヤエのもつ別キャラクター『ヤーヴェ』はレベル90で装備もスキルも揃った守護騎士ガーディアン。通常のパーティー戦闘では猪突猛進気味なのだけれど、何故かレイドモンスターとの戦闘でのタンク役は上手い。まあ付き合っても長いので色々やりやすさというのもあるけれど。あと、『ヤーヴェ』のキャラクターは男性のエルフ。いわゆるネナベで見た目とチャットの声が合わなくて気持ち悪いという問題もあるけれど。

「山ちゃんはギルド内でレベル75下限で4パーティー編成、子ベヒだったら予備タンクは要らないだろうから、タンクパーティー1と補助系1、残り2つはアタッカーで良いかな。私はタンクのところ、山ちゃんは補助のところ入ろうか」

「了解です。今までのレイド参加回数を加味して、経験の少ないものを優先で編成します」

で、最後がそれ以外のメンバー。今回相手をする レッサーベヒモスは物理攻撃のみで魔法等の変則攻撃をしてこないから、アタッカー陣はそこまで経験のあるメンバーじゃなくてもこなせる筈。

最近は『新皇の帰還祭』とか『武帝の遺産』の方につきっきりで、レベル80以下のメンバーが活躍できる場がなかったから丁度

良い機会だろう。

「おお、単体レイド大突貫祭りかよ！ 久々じゃね？」

「黒姫指揮マジで！？」

「やった、三佐さんから参加通知きたぜ！」

「今回はハズレかよ！ ちくしょう、参加権よこせ！」

ギルドチャットが興奮したメッセージでスクロールしていく。  
たかが単体レイドではあるが、まあ、ちよっとしたお祭り気分なのだろう。

「そんでは、そんな感じでいってみよか。参加メンバーは30分後にシンジユク駅ビル廃墟集合！」

「「アイ・ママ！！」「」

うん、いつのまにか恒例になってしまったそれだけはやめてもらいたいんだけどね。

## 前編（後書き）

「西風と疾風」を公開してる、相馬将宗さんとTwitterで交わしたネタを元に書いてみました。さてさてちゃんと着地できるだろうか？

12/3 3年前とか明記すると色々矛盾がヤバイので濁しました。

## 中編（前書き）

第1ラウンド。

なんか色々矛盾が発生してしまいそうなので、大災害の数年前で、  
てことで濁らせてください。

## 中編

「すまない、『黒巫女主宰 チキチキ！単体レイド大突貫祭り』ドロップあつたらオークションもするよ！」の集合場所は此処で良いのだろうか？」

黒装束のいかにも アサシン 暗殺者 といった格好の長身の男性キャラクターが、私に対して文字チャットで問いかけてくる。ギルド外の募集枠に手を上げてくれた参加者さんだろう。

ボイス・チャット全盛の最近の エルダー・テイル 事情ではあるが、キーボードを使つての文字入力にて意思疎通をするプレイヤーというのも少数ながら存在する。

喋るのが苦手だったり、ゲーム内で演じるそのキャラクターの雰囲気重視していたりと、理由は様々なようだけれど、その多くはプレイヤー自身の性別と操るキャラクターの性別が異なる場合が多い。まあはつきり言ってしまうえば見た目は女の子なキャラクターだけど中身男性なネカマさんの常套手段というわけだ。

ちなみに傾向としてはヤエのように中身女性の男性キャラは文字チャットを使わず、普通にボイス・チャットを使うことが多いのでこの彼に関してはただ単に喋るのが苦手とか、パソコンにマイクが付いてないとかそういう理由かもしれないけれど。

「うう、はい。ここでオーケーです・・・」

何となくそれにつられて、私も文字チャットで返事を返す。

しかしユタの奴、なんてとんでもないタイトルで討伐宣言出しかるか。画面上のチャットウィンドウに残ったままになっているさっきの男性のチャットの文字が恨めしい。ボイス・チャットだった

らまだ一瞬の羞恥心で済むのに、これは何とというかある意味拷問である。

「ユ〜タ〜!! 討伐宣言どんな文面で出しやがったか!!」

「ユタなら今日はこのあと用事があるとかでさっきログアウトしました」

ちくしょうユタめ、逃げやがったな。あとで覚えてろよ。

現在私達はシンジユク駅ビル廃墟のサウスゲート、現実世界でいうとJR新宿駅南口にあたる位置で、単体レイド参加者の集合を待っている最中だ。シンジユク駅ビル廃墟はヤマトサーバーの中でも比較的広い部類に入るフィールドで、その構造もギョエンや地下ななどのダンジョンフィールドとの繋がりがあつたりと複雑だ。

入り口も今回集まったこの場所以外にも複数存在するのだけれど、今回の単体レイドの対象になる レッサーベヒモス は幸いなことにサウスゲートから入って数分の所に出現してくれている。

ダンジョンフィールドでの単体レイドの場合、その出現位置まで大人数で移動するのも結構苦勞する部分だったりするのだが、今回に限ってはそっちの心配はしなくてもよさそうである。

「そんなことよりギルドの参加メンバーおよび外部募集メンバー全員揃いました。スタート前のブリーフィングを始めたほうがよいかと愚行しますが」

「そついつの苦手なんだよなあ。山ちゃんやってくれない？」

「駄目です。却下です。今回の責任者は先輩です。ちゃんとシゴトしてください」

山ちゃんがつめたい。お姉さんは悲しいぞ、そんな子に育てた覚えはないのに。

うう、でもしゃあないか。まあ定型文だし、とっととやることやってしまおうか。

「それでは、えー皆様。本日は D・D・D 主宰、単体レイドレッサーベヒモス 討伐に参加頂きありがとうございます。えーと、うち主宰のレイドが初めての方も居ると思うので説明しますが、このあと D・D・D のパーティーで先頭と殿をつとめての出現位置への移動の後、私のカウントにて攻撃開始となります。多分30分もかからず終了すると思うので、出来るだけ最後まで参加お願いします。ドロップアイテムはその現地でオークション。現金化の後、参加メンバーの頭数で割った額を分配します。オークションで全てのアイテムが捌けなかった場合、金貨の受け渡しは後日になるので、そうなたら私の方で参加者全員フレンド登録させて頂きますのでご了承ください。他、何か質問ある人いますか？」

「俺、レイドって初めてだよ。おまけに D・D・D のヤツとかラッキー」

「お、本当に 突貫 主宰かよ、レアじゃね？」

「あそこで鎌持ってる <sup>バード</sup>吟遊詩人 って最近噂の高山三佐？」

「三羽鳥が2人揃ってるとか、スクショとらねえと！」

「バナナはオヤツに含まれますか？」

うむ、ざわざわと色々話しているプレイヤーは居るものの特に質問とかはないようだ。

あと、ベタすぎること言ってるアホなヤエは無視。

「ほい、特に無いみたいなんで、行きましょか。タンクPT先頭、

アタツカPTひとつ一緒についてきて。外部参加の方達はその後ろ付いて来てください。山ちゃんに残りで殿よろしく。ってなかんじで「ゴー」

集なったメンバーのレベルは80前後と現在90まで上がった最高レベルを考えると若干低めではあるものの、今回の討伐対象 レッサーベヒモス は単純な物理攻撃のみの比較的倒すのが簡単なレイドモンスター。タンクもヤエだし山ちゃんも居るしと戦力的には問題なし。

何人が運が悪いプレイヤーが死亡することはあっても、失敗することはないだろう。

その時は、そう楽観的に思っていたのだ。

ヤエや私を含む敵の攻撃を引き付ける役、いわゆるタンクを担当するパーティーが、通常のモンスターの10倍はあるうかという巨大な黒い牡牛のような姿の前で攻撃のための布陣を整える。

他のパーティーは背後から攻撃をするために私達とは レッサーベヒモス を挟んで反対側に、少し距離を置いて布陣する。

レッサーベヒモス はノンアクティブと分類されるレイドモンスターで、こちらからちょっかきを出さない限り、近づいても攻撃してくることがない。そのため、このように落ち着いた状態で戦闘準備ができるのだ。

「それでは、タンクPTが先行します。アタッカー陣の攻撃は敵懐<sup>ハ</sup>心を十分稼いでから。タイミングは私がカウントするんで、それよ

り前の攻撃だけは絶対ナシでよろしくお願いします。んじゃヤエ、始めちゃって！」

「ほいほいりょーかい。じゃあいつくよ。ヒーラー様方、よろしくね。」

なんとも緊張感のない宣言とともに、ヤエがタウンディングスキル、アンカー・ファングを、レッサーベヒモスに対して放つ。レッサーベヒモスは巨大な2本の湾曲した角をもつその頭を振って雄叫びを上げた後、まるでマタドールのもつ赤い布ムレクタに興奮する闘牛の牡牛のように襲いかかる。

ヤエはその攻撃を、手に持つ盾で受け、逸らし、そしてその体に受けつつ、アンカー・ファングを放ち続ける。

レッサーベヒモスから受けるダメージと、同じパーティーに所属する複数の回復職からの回復魔法でヤエのHPは乱高下するものの50%程度で均衡しており、これなら余程のトラブルが発生しない限り問題もないだろう。

「それじゃ、攻撃カウントダウンいくよ！ 5 / 4 / 3 / 2 / 1 / 攻撃開始！！！」

私の合図と共に、今か今かと出番を待っていたであろう、他のパーティーのメンバーたちが攻撃を開始する。

アサシン 暗殺者 の弓が、ソーサラー 妖術師 の攻撃魔法が、サモナー 召喚術師 の召喚した幻獣や精霊が遠距離から派手なエフェクトを伴ってレイドモンスターに対して攻撃魔法を放ち、その足元には近接武器を得意とする武器攻撃職のプレイヤー達が群がり、普段の狩りではMPの残量と睨み合いつつ小出しにする攻撃スキルを出し惜しみすることなく乱発する。

私のパソコンのディスプレイに映るのは多量のスキルエフェクトで、半分以上が何かなんだか判らなくなってしまっている戦場の風景。もうこうなってしまうたら、攻撃担当のプレイヤー達は自分の最大攻撃力を持つスキルのアイコンを連打するくらいしか手段はないだろう。

とはいえ私のような回復職や、山ちゃんみたいな補助スキルを主とする バード 吟遊詩人や エンチャンター 付与術師 などにとってはここからが正念場。この均衡状態を維持できるかどうかは私達、アタッカー以外のプレイヤーにかかっているのだ。

私はヤエのHPの残量を示す赤い帯状の表示をにらみつつ、他の回復職のスキル使用状況や残りのMPの量を見つつ、ダメージ遮断魔法をヤエに対して発動する。

レッサーベヒモスのHPの減っていくスピード、ヤエがタウディングスキルを使い続けるためのMP残量、パーティー内でヤエに回復魔法をかけ続ける回復職達のMP残量を見ながら、私は勝利を確信する。

アタッカー陣のレベルや装備がいつもに比べると少し低めなのでレッサーベヒモスのHPの減りが鈍いけれど、今までの経験から言ってもこのペースでいけば結構な余裕をもったまま レッサーベヒモスを倒しきることができる。

今回も何とかなったかなと、少しは緊張していた気持ちがあつと軽くなったそんなタイミングで、山ちゃんからきな臭い報告が上がる。

「先輩！ サウスゲート方面から4パーティーが連携していると思われる動作で接近中。まだ目視は出来ていないのでどこの所属かは判りませんが、こちらに向かっていると思われれます」

む、レイドとは関係のないビル廃墟での狩りが目的か。とはいえこの狩場で複数パーティーで行動というのも不自然な気もする。そしてもうひとつ気になるのが4つというパーティーの数。

私達が現在6パーティーで相手をしているこの レッサーベヒモスは本当であれば4パーティーで討伐することが可能と設定されている、フルレイド 中規模戦闘 ランク。色々と混乱のあった数年前ならともかく早い物順な暗黙のルールが認知されている現在、変なことは起きないとは思っただけけれど、なんだか嫌な予感がする。

その接近してきているというパーティーは、まもなく私達が戦っている広間にその姿を現した。

すべてのメンバーが高レベルの武器、防具を揃え、なおかつ揃えたように黒系統。大規模コンテンツを競い合う場で見ることがあるような顔もちらほらと見えるあたり、どこかの戦闘系ギルドなのだろう。あまりギルド名に覚えがないのだけれど。

先頭に立っていた守護騎士ガーディアンと思われる、黒い鎧に黒い大きな剣を構えた男が何かの合図をすると、その集団は一斉に動き出す。

大規模戦闘ギルドならではの統制の取れた動きだ。

「乱入してきたパーティーが、レッサーベヒモス に対して攻撃を開始しました！ 4パーティーは同じギルドのタグを付けています。ギルド名は 黒剣騎士団 ！」

山ちゃんとしては珍しく、緊張した声で報告を上げる。

ああそうか、黒剣騎士団 ってたしか ラダマンテユスの王座で（幻想級）の武器手に入れたとかっていうあいつらか。

何かその武器の名前からとってギルド名変えたとか頭悪いことやってるなあとか思ってたんだけど、よりによって私が単体レイドやってるときに出てこなくなっちゃっていいじゃないか。

とはいえ一応私はこの場の責任者。このまま何も言わないわけにもいかないだろう。

私はこの集団のリーダーっぽい、黒い鎧を着込み赤い頭髪を立てた柄の悪そうな兄ちゃんに声をかける。

「こらちよいまで！ 共通掲示板に討伐宣言出してるんだけど！ あとからちよつかいは行儀わるくないかい？」

「悪いな！ 俺達はすまし顔の陰険メガネや、お行儀ばつかしいアインス先生なんかが決めた仲良しルールに従うつもりは無くてもよ！ 中小零細とならともかく、うちやお前達んとこの間で仲良しゴッコもねえだろ。強いほうが持つて行くつてのが判りやすくもいいじゃないか。てなわけで横槍入れさせてもらうぜ！！」

「やったッ！！ さすが大将！ おれたちに言えない事を平然と言つてのけるッ！」

「そこにシビれる！ あこがれるウ！」

「おら、かかってこいや D・D・D！」

「ボス、どう考えても言い訳できないレベルで悪役ですよ、そのセリフ・・・」

トサカ頭の取り巻きがはやしたてる。

うわなんだこのDQN集団。

「ま、そういうことだ。女に口で勝てる気はしねえからよ、文句があったら実力行使で来てくれ！」

そういうとトサカ頭は禍々しい装飾の黒い剣を構え、レッサーベヒモスへと突っ込んでいく。

タウンディングスキルを連発したのだろうか、数瞬の後、ヤエに対して執拗に攻撃を繰り返していたレッサーベヒモスが、トサカ頭に標的を変え、その巨体の向きを変える。

「うっそ？　なんでそんな簡単に敵愾心<sup>ヘイト</sup>もってかれちゃうわけ！？　おかしいでしょ！」

ヤエから悲鳴のようなそんな声上がる。

うちのアタッカー陣もどうしていいのやら判断にとまどい、その攻撃の手が止まってしまふ。

対して 黒剣騎士団 はあのトサカ頭をタンクにした布陣も整い、完全に布陣を整えてしまっている。

悔しいがこの場のペースは既に彼ら 黒剣騎士団 のものだろう。

「むむ、明らかにケンカ売られた状態だけどき、クシどする？　殺っちゃうっ？」

やることなくなくなってしまい、私の横にやってきたヤエが物騒なことを言う。

売られた喧嘩、買ってしまったのは山々ではあるのだが、一応私はこの場の責任者。無責任なことをしてしまうわけにもいかない

だろう。

「・・・今回のメンバーのレベルとこの消耗しちゃってる状態だと、レッサーベヒモス 使って共倒れは出来る可能性ありそうだけど、完勝は無理っぽいなあ。外部募集の人達も今回は居るし、腹立つけど引こうか・・・」

「そうですね、ギルド外のプレイヤーを巻き込んで他ギルドとのこれ以上の争いは隊長が居ないこの現状、避けたほうが良いでしょうね」

同じく私の近くに戻ってきていた山ちゃんも、撤退の意見に票を入れる。

まあこの場はしょうがないだろう。後々ギルド間でいざこざとかは残るだろうけど、そんな面倒なことはクラスティ君に任せてしまおう。

「うっし、しゃあない決定。特に外部の募集から来てくれた方達には申し訳ないんだけど今回の討伐は中止。撤退します！ 帰還呪文残ってる人は離脱しちゃってください。無い人は私の近くに集まってね。んでもって、帰還後アキバのブリッジ・オールエイジス集合でよろしく！」

D・D・D のメンバーや今回参加してくれたプレイヤー達が帰還呪文のエフェクトを残し、この場を去っていく。

残っているのは今日の分の帰還呪文を既に使ってしまったであろう数名と私、ヤエ、山ちゃんと討伐を目前とした 黒剣騎士団。

「なんだよ、喧嘩買ってくれねえのかよ、つまんねえな。 突貫

の名が泣くぜ？」

「うわ大将マジ悪役！」

「ソード・オブ・ペインブラックTUEEE！」

「D・D・D 撤退とかオレたち最強じゃね？」

「おら、わくわくしてきたぞ！」

なんだかはやしたててくるが、それに反応してしまっただけはそれこそ負け犬の遠吠えになってしまう。

私達は レッサーベヒモス が倒されるのを待たず、その場に背を向けた。

というわけで、私がまとめ役をやらされることになったこの日の単体レイド攻略は、死者こそ出さなかったものの 黒剣騎士団 の妨害により失敗に終わってしまったのだ。

## 中編（後書き）

ゲームの設定は完全に妄想ででっちあげです。ごめんなさい。

本家を読んでもEQ2とかFF11とかあたりの影響が大なのかなあと感じられるのですが、残念ながら私はそのどれも未経験。あとD&Amp;Dというかパスファインダーあたりなのかなあ。

なので、ゲーム的要素の描画は私の経験したことのある、それ以外のMMOにとっても引っぱられてしまっています。

人によっては何やってたか判るんじゃないかな。

あと当時のゲーム内の知り合いとか読んだらバレバレだよなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8929w/>

---

辺境の街じゃない所にて？

2011年12月3日21時09分発行